

## 2018 年度 研究功労賞推薦書

受賞対象者 堀 智勝 先生

堀 智勝先生は 1968 年東京大学医学部を卒業されました。卒業と同時に佐野圭司教授が主催する東京大学医学部脳神経外科教室に入局し、その後医学部紛争の影響もあり、東京警察病院のレジデントとなり、てんかん学を石島武一先生に基礎から学ばれました。4 年のレジデントを終わって、1972 年 10 月より東大病院医員、助手になったところで、真柳佳昭先生、佐野先生から推薦を受けてフランスパリサントアンヌ病院に 1973 年 10 月より 2 年間留学されました。機能脳神経外科を専門とする Jean Talairach 教授と機能血管解剖、機能外科を専門とする Gabor Szikla 博士に師事して、SEEG, てんかん外科、脳腫瘍へのアイソトープインプラント、糖尿病性網膜症に対する Au<sup>198</sup> のインプラントなど多彩な脳神経外科機能外科を学ばれました。また、Talairach, Bancaud 先生のフランス語圏脳外科学会での *Approche nouvelle de la neurochirurgie de l'épilepsie. Methodologie stereotaxique et reultats therapeutiques. Neurochirurgie, Tome 20, Suppl. 1, Juin 1974.* という宿題報告がマルセイユで行われ、その本の共著者になっておられます。Szikla 博士の指導のもと *Angiography of the Human Brain Cortex (Springer-Verlag) 1977* にも共著者として名前を連ねておられます。その本と *Brain Research* にも掲載された研究として *Asymmetry of the human temporal planum based on the language dominancy* が東京大学医学部の学位論文になっております。私も同時期に、Robert Naquet 教授のフランス国立科学研究所に留学しており、実験てんかんモデルを用いた基礎的研究を行っていました。パリでのフランスてんかん学会の折、偶然堀先生に初めての日本人としてお会いして、その時以来の親友となりました。堀先生は帰国後 1976 年には学位、さらに専門医試験合格後、脳神経外科手術の研鑽のためマイクロ脳神経外科の勉強を続け、東大の 2 年間の在籍の後には駒込病院医長となり、下垂体腫瘍、グリオーマ、聴神経腫瘍などの手術やコルドトミーや下垂体アルコール注入など、機能脳神経外科を研鑽されました。1981 年には恩師佐野圭司教授から鳥取大学の助教授に推薦され、米子に 1981 年 1 月 1 日赴任されました。文字通り 24 時間脳外科の救急から教育研究まで死に物狂いで当初は月に 5-6 回の当直をしながら働き 3 年経過したところで鳥取大学脳幹研究施設外科教授とされました。教授となってからは、留学で修得したてんかん外科を再開され、左海馬の硬化が疑われる患者さんに、Talairach 方式による SEEG を応用し、東海理化のステレオのフレームを用いて深部電極を海馬、扁桃体に挿入してビデオ脳波を記録されました。すると見事に左海馬に局限した発作が数回記録できたとのこと。Talirach 先生は、てんかん手術は側頭葉外側から電極に沿って焦点切除術を行われたので、堀先生はこれを応用され、側頭下アプローチによる選択的扁桃体海馬切除術を完成されました。神経機能脱落を最小限に軽減する方法として高く評価され、1993 年の *Neurosurgery* に論文を発表されています。また摘出標本に関し

ては脳神経外科から神経病理に移った宮田 元先生に一切のてんかん外科標本に関して診断して頂いて多くの成果を発表されています。その後東京女子医科大学に移られ、てんかんチームを立ち上げ、第42回日本てんかん学会を東京で開催されました。東京女子医科大学を定年退任後も森山記念、新百合ヶ丘総合病院、そして現在は東京脳神経センター病院にててんかん外科を続けておられます。最近ではMRIガイド下超音波集束装置によるてんかん治療を世界に先駆けて手掛けておられます。

てんかんの外科的治療を長年にわたって研鑽され、手術による神経機能の脱落症状を可能な限り軽減するための手術を研究されてきた堀智勝先生が、てんかん治療研究振興財団の受賞候補者に指名されたことは、まことに名誉なことであり、ご推薦申し上げます。

国際抗てんかん連盟 副理事長  
旭川医科大学 名誉教授  
やまびこ医療福祉センター 名誉院長

田中 達也